

## 熊本大学学術リポジトリ

## Kumamoto University Repository System

|            |   |
|------------|---|
| Title      | 編輯漫語  |
| Author(s)  |   |
| Citation   | 龍南, 198: 72-73  |
| Issue date | 1926-07-10  |
| Type       | Departmental Bulletin Paper   |
| URL        | <a href="http://hdl.handle.net/2298/8865">http://hdl.handle.net/2298/8865</a> |
| Right      |   |

新潮、女性、大衆文藝が兄たり難く弟たり難して伯中した。

改造、思想、社會科學が知識程度の上からして下位にありしは致方ない所であつたらふが、文藝戦線や文藝市場といふ新しい関きを見せたものもあつた。これが三ヶ年の龍南生活によつて如何に育まれて、變化し發展しゆくかは盡し興味ある問題たるを失はぬ。

× × ×

宇佐美教授の文藝講演會、前委員小關氏等の懸案になつてゐた文藝講演會を宇佐美先生の御快諾を得てその第一回を開くことをめたのは感謝に堪はないのである。さて講演は五月五日放課后端邦館で行つたが演題は「伯林觀劇雜感」といふ素的な面白いもので、先生の口をついて出るあの熱辯はオペラの都伯林を我々の若い胸に懷はせるにふさはしく、先生の輝ける双眸にはつい半年前に觀覽して廻はられた劇場の藝術の殿堂を凝視しておられるまなざしがマザ／＼と映つてゐるかに拜した。龍南における始めてのこの種の催しが諸君の賛同を以て滿堂立錫の餘地なく、盛大を極めたことを喜び誌すと共に如何に我々龍南人の心に美に對する憧憬の強烈なるかを知るをめた。終りに宇佐美先生に對して誌上から厚く御禮申しておきます。(N・I生記)

## 編輯漫語

井 上 生

あ、狂闘に血は燃ゆる雪辱の日は將に二旬の後に迫つた。一勝六敗又一勝二敗の慘として光なき龍南敗北史。虐げられしものよ汝の名は龍南。弱き者よ汝は五高生なりと叫ぶ私の知己の龍南人の言葉が泌みじみと諸君の胸を貫き響かないか。そうだ過去の龍南、それは哀れにも薄れゆく影の敗者の姿だつたのだ。だが過ぎゆくもの、姿のみを以て龍南の眞生命をその將來を豫斷することは出来ない。松林を越えて太鼓の音が聞えてくる。カレンダーは17さめくられてゐる。そうだ今日は示威運動の日だ。示威運動！劃時代的示威運動！過去一切の屈辱史への挑戦へと光榮への力強き第一歩を進めるのだ。龍南の天地よ、我等が若き日に光あれ。

× × ×

編輯于今度の編輯には全く以て閉口仕り候だ。集つた原稿の數——論文五、創作五、詩一、短歌二篇である。併し以上の内當局より檢閲の上保留されたり、内容レベルに達せざるありなどして、結果は御覽の通り。本號はゆくとして可ならざるなき現龍南文壇の精華なりと揚言すべく、私は生憎の蠻勇を持ちえません。華々しき龍南文壇の現狀を俯瞰する時、まだ——潛勢力の偉大なものを認め。如何に龍南人中心の同人

雜誌が四つもあり、その方面で忙殺されておるとは云え、各同人諸兄始め諸君の龍南愛が涸れか、つておはしないかと杞憂する。諸君大いに御投稿ありその美を競はれては如何に。

時に各雜誌同人諸氏に再考を請ふてやまぬ。編輯者に對しての不満でも介在しておるならば容赦なく述べてもらへば結構喜んで拜應する。そんな格式ばつた談論はよして御頼みする次號は懸賞(この言葉が氣に入らぬ人もあらうが)の特別編輯號だ。年々一回位ひは、諸君の力作を以て「龍南」をして名實共に龍南文壇の各方面を網羅する堂々たるものとしたいものだ。今から力作を編輯子テコ舞する程寄せて下さることを願ひます。それから部報が少ない「龍南」が學友會誌なる以上、それは論文、創作等と同價值を有するものなることは先刻以て御承知の筈。各部員諸兄も御多忙だらうが健筆を振つて下されることを祈る。

先輩の赤星さんや、姉川氏から玉稿を戴きましたことを感謝します。同じく龍南に若き生命を育まれた兄弟同胞なる先輩諸兄と在校生との暖かい握手の使命を本紙が遂行しうるならば編者又龍南人として喜悅これにすぎるなど。今後共に先輩諸氏の母校愛に訴え投稿、鞭撻、示教を望んで止みませぬ。次に先輩藤本氏より堂々たる論文を拜受しましたが、八波部

長と談合の上保留になりました。珠玉の文字が諸君の前に現れなかつたことを、深く藤本先輩の御寛容を請ふと共に、遺憾千萬に存じます。

前號豫告の文藝講座は、前學期藤森教授に御願ひしておきましたが、先生も御榮轉前で御多忙その中富山に去られまして日の光を見ずしてやみました。五月上旬の文藝講演會の後に何とかして試みる豫定でしたが五月中旬からは、七高戦の應援も開始され、文藝講座によりて新興勢力分子の應援熱を殺ぐが如きありては相濟まず、それに屈辱を重ねた今日七高を葬るためには龍南人は一切を犠牲に供せねばならぬと確信して一學期は決行しないことにしました。委員の意慢とのみ御告めを蒙らざる様一言以て辯明迄、文藝講演一回のみでは氣なかつたでせうが何卒二學期まで御用捨ありたい。

節梅霖に入れど雨降らず、暑熱益々猛威を逞しうせんとす。我等亦かゝる時一學期の決算期を目前に控えたり。諸君御用意はよいかとまれ試験で油搾られ、七高戦では永年の鬱憤を晴らして勝利の美酒に酔ひ、意氣揚々歸省、五十日を呑氣に山に抱かれ海に接吻するさ、二ヶ月會えない、御互ひに健在であつてくれ。